伝説の忍具のスペシャリストになってやる！？(改)

御庭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
伝説の忍具のスペシャリストになってやる！？（改）

【Ｎコード】
Ｎ８２６７Ｚ

【作者名】
御庭

【あらすじ】
まぁ…転生モノです。

面白いかは…貴方が感じる事ですよ？（笑）

聞き分けの良い者？

？「此処は？」

”私”は気付いた時…いつもの私の部屋じゃない事に気付いた。

私「…なんで周りが真っ白なの？」

私「もしかして…私…死んだ？…だって、なんか此れ…私がたまに詠んでいた…ニ次小説の流れ出し…まさか…自分がそうなるなんて…ってか…神様？隠れてないで出て来なさいよ！」

神「なんじゃ？お主…もっと驚かんか？」

私「…驚く？私が？…何故？」

神「何故って…お主…死んでおるのじゃぞ？」

私「そうですね？でも、何故驚く必要が？どうせ…間違えて死んだとかいうオチな気がします！…それで…何処か…いや…「ＮＡＲＵＴＯ」の世界に転生とか…チート能力を付けてくれるとか…そんな話が此れからありそうですね？」

神「…ワシが言いたい事を全て言われた…まぁ…話が早くて嬉しいが…チート能力は何がよい？幾つでも良いぞ？」

私「マジっ！やったぁ！…そうだな！…

1、テンテンを赤ちゃんからやり直し！

2、チャクラ無限大！でも、成長に合わせて増えていく！

3、忍具を時空間忍術で出せるように！…出来れば自分も移動出来

るようだと尚、嬉しい！
4、医療忍術も使えるようにして！
5、容姿はセミロングヘアーでゆる袖チャイナ服！
6、後は…直死眼！

…以上！
神様？出来ますか？」

神「…良かろう…じゃあ、早速行ってもらう…あ！頭の中でワシを呼べば話は出来るからのぅ…まぁ、着いたら試してみろ」

私「分かった！着いたら連絡ついでにする！」

そんなやり取りを終え私は「ＮＡＲＵＴＯ」の世界へいった。

歳月。

私が神様の何処から姿を消した後、私が目を開けると二人の男女が私を覗いていた。

女「あ！テンテンが目を覚ましたわ！」
女が嬉しそうに言う。
テンテン（…転生成功ね）
男「俺たちの愛の結晶だな！」
男は真面目な顔で嬉しそうに女と手を取りあった。
テンテン（…恥ず！ってか…この人たちが…私の両親か…痛いなぁ（笑））

テンテン「あぅ？」
テンテン（…ヤバい…私…何を伝えたいのか…言葉が出てない！…流石は赤ちゃん！）

女「テンテン…明るく元気に…でも、真面目な子に育ってね？」
男「…母さんに似て可愛く育ってくれよ」
母「あら？（笑）私に似たらモテるわよ」
父「…ん？母さんと同じで”将来、父さんと結婚する！”って言って欲しい」
母「…あら？娘と浮気したいと？」
父「え？…いや、そう言う意味では…」
父さんは母さんの和やかな微笑みに引き攣りながら困っていた。
そんなやり取りを見終えて私は眠りについた。

私が転生して3ヶ月が経った頃、それまでに両親を観察してみて分かった事は…二人は医療忍者だった。
交代で任務に入り、私の世話をしたりしていた。

絵本が無かったからか、両親は医療忍術の本を私に読み聞かせていた。
テンテン（…まぁ、赤ちゃんには難しいから分からないって思っているんでしょうね…）

両親が姿を見せない時は、一人でチャクラコントロールを練習して過ごした。
テンテン（足と掌にチャクラを少し集めて…っと）

私は転生して半年後には掴まり立ちをする程になっていた。
両親は”うちの子は天才だぁ！”っと騒いでいたらしい。

その後、”九尾の事件”が起き、私は医療班として任務を受けた両親を無くした。
そして、里の多くの人たちと四代目・ミナトさんとその妻・クシナさんも亡くなられた。

両親を無くした私は三代目の処へ連れてこられた。
私は両親を殺した”九尾の妖狐”が封印された”うずまきナルト”と姉弟のように育てられた。

テンテン（…ナルトは悪くない…悪いのは…アイツ）

ナルトと一緒に過ごす事が多くなった。

ナルトと一緒に育てられてから3年の月日が経った頃、私はナルトと修行する事が多かった。
チャクラコントロールの強化の修行を行った後、私はナルトと一緒に商店街へ買い物に行った。

ナルト「テンテン・・・なんで俺睨まれているの？」
テンテン「ん？・・・あぁ、ナルトの中には”九尾(キュウビ)の妖狐(ヨウコ)”が封印されているからじゃない？」
ナルト「”九尾の妖弧”？って何？」
テンテン「んー何って言うか・・・一言で言えば”尾獣(ビジュウ)の化け物”かな」
ナルト「それで睨まれているの？」
テンテン「えぇ、でも私はナルトと一緒に居たいから居るんだからね？」
ナルト「俺・・・テンテンと一緒に居たい」
ナルトは小さく微笑んだ。
テンテン（ナルト）

私とナルトは八百屋と魚屋、肉屋を周り買い物を済ませて家路に着いた。

和解をする為に…

ナルトに”九尾の妖狐”の話をした事を私は三代目に伝えると、深い溜息をされ、この事は誰にも言うなと注意された。
部屋に戻り、ナルトにも注意し、何も知らない風に装った。

その後、演習場に向かう時、たまに話をするある二人を見かけた。
テンテン（あ…アレは拷問（ゴウモン）・尋問特別部隊（ジンモントクベツブタイ）のイビキさん？…っとアンコさん？…何かあったのかしら？）

私とナルトは二人の様子を少し見た後、又三代目の処へ向かった。
三代目「ん？テンテン、ナルト…どうした？」

テンテン「三代目…お願いがあるのですが、私とナルトを忍者養成学校（アカデミー）に入学出来るようにして下さいませんか？…理由は…夢の為です！」
三代目「ナルトの意見はどうなのじゃ？」
ナルト「じーちゃん…俺はテンテンとずっと一緒に居たい…だから、俺はテンテンと忍者養成学校（アカデミー）に入学し、共にこの家を出る！」
三代目「…良かろう…しかし、５歳になってからじゃ…それ迄に色々準備をしなさい」
テンテン「了解です！」
ナルト「ありがとう！じーちゃん！」
その日から私とナルトは修行を精を出した。

私は忍具と医療忍術の修行。
ナルトは忍術、封印術と体術の修行を揉捻に行っていった。

私の修行を見た三代目は…

三代目「…医療忍術をこの年で粗マスターしているとはな…流石はあの二人の子じゃ」
って言っていた。
そして、ナルトの修行を見た三代目は…
三代目「…封印術の修行か…やはり…血は受け継いでいるのぅ…ミナト、クシナよ」
小さく呟いた。

私はある程度、修行した後、ナルトに声をかけた。
テンテン「ナルト…此れから自分の精神に入って九尾の妖狐に会って和解して貰う…これはナルトにとって良い事だから…怖かったら辞めても良いからね？」
ナルト「…だ、大丈夫！やってみる！」
三代目「ナルト…無理はするなよ？お主に何かあったら…ワシは…」
ナルト「じーちゃん…ありがとう」

それから、ナルトは九尾の妖狐と和解する為に精神に入っていった。

和解と警告と九尾

ナルト「此処が俺の精神…九尾の妖狐が此処に封印されているのか…和解…したら、テンテンと又会える…でも失敗すれば…俺は…やるしかない！」

ナルトは精神の世界を見渡すと、ただ真っ暗な空間があるだけだったが、歩いていると、巨大な檻が目の前に現れた。

九尾［貴様は…ナルトか…何のようだ？…和解だと…俺と勝負しお前が勝てば和解し、お前におれの力（チャクラ）を貸してやる…もしお前が負けたらお前の体を俺によこせ！］

ナルト「…俺が勝てば和解成立か…じゃあ頑張るしかないな…九尾…勝負だ！」

そのやり取りが終わった後、ナルトと九尾の妖狐は勝負した。

結果から言うと…ナルトが封印術を使い、九尾の妖狐に勝った。

勝負を終えた後、ナルトは九尾の妖狐に言われた。

九尾［…約束通り…お前に俺の力（チャクラ）を貸してやる…しかし、これだけは言わせてもらう…”うちは”には気を付けろ！…ただそれだけだ］

九尾の妖狐がそう言うとナルトの体は輝きだし…

ナルト「…”うちは”？」

ナルトは首を傾げながら精神の世界から私と三代目がいる世界に戻っていった。

テンテン「ナルト！どうだった！和解の方は！」

ナルト「テンテン、じーちゃん、和解は成功したよ！力貸してくれ

るって！」
三代目「そうか、良かった…ナルト」
私と三代目はナルトを抱き寄せて嬉しんでいた。

ナルト「なぁ…じーちゃん？九尾の妖狐が気になる事を言っていたんだけど…”うちは”には気をつけろ…って…アレ、どういう事かな？じーちゃんは何か知っている？」
三代目「九尾のヤツはそう言っておったのか…ウム…調べさせておこう」
ナルトの言葉に三代目は少し眉をピクッとさせた。
テンテン「…”いちは”には気をつけろ…か、三代目、多分、九尾の事件に関わりがあると私は思います」
三代目「テンテン…九尾の事件に関係あると？」
テンテン「はい、だって、九尾の妖狐がそうナルトに伝えたと言う事は…間違いないかと」
三代目は少し考え…
三代目「…うちはから暗部（暗殺戦術特殊部隊（アンサッセンジュツトクシュブタイ））に一人が配属している…そやつの弟がナルトと同い年じゃ…そやつも忍者養成学校（アカデミー）に入ってくるやもしれん」
テンテン「では、警戒はしていたほうが良いですね」
三代目「あぁ」

九尾［ナルトよ］
テンテン、三代目と話を終えようとした時、頭の中に九尾の妖狐の声が、響いた。
ナルト（九尾か？…なんだ？）
九尾［うちはは…いずれ又動く］
ナルト（え？動くってどう言う事だ！）
九尾［…その娘も何か分かっている］
ナルト（その娘？ってテンテンの事か？）

九尾［あぁ…その娘の中に…我と同じような力が察知出来る］
ナルト（九尾と同じ力？…どういう事だ？）
九尾［我にも詳しくは分からん］
ナルト「…そうか。分かった…動く事は伝えた方が良いか？）
九尾［娘には教えておけ…三代目には…教えんでいい］
ナルト（分かった）
ナルトが九尾の妖狐と話している間、私は”うちは”の事件を思い出していた。
テンテン（原作通りなら…サスケが一人残るはず…はぁ…どうするかな）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8267z/

伝説の忍具のスペシャリストになってやる！？(改)

2011年12月29日11時53分発行